

開催地名：愛知県知多市	
開催日時	令和4年2月6日（日） 10:00～11:30
開催場所	知多市健康推進課（知多市保健センター）
語り部	茨島隆 （青森県八戸市）
参加者	知多市災害時健康活動サポーター 30人程度
開催経緯	<ul style="list-style-type: none"> <li>・南海トラフ発生の危険が指摘されてはいるが、ソフト面、ハード面共に準備不十分。（マニュアル、避難所・救護所での医療体制について）</li> <li>・専門職の集団ではあるが、災害時、特に直後の動きについて、具体的にイメージがついていない。</li> <li>・研修の機会はあるが、災害時の全体のイメージや、何を優先させて動くべきなのかなど、実践的な内容にまで落とし込めていない。</li> </ul>
内容	<p>(1) 東日本大震災時の記憶</p> <p>東日本大震災時の八戸市の被害として、地震より津波の被害が多かった。津波は6.2mや10mなど、地形等により高さは異なるが、沿岸部を中心に多くの建物で被害を受け、八戸漁港の物流拠点機能が麻痺するなど、沿岸部近海地域の企業群等の生産活動は停止したことも分かっている。市内では死者1名、行方不明者1名、岩手県内で死亡した八戸市民4名、行方不明者1名、計7名が犠牲となっている。被害総額は1,213億円。住家の全壊は254名、住宅が半壊以上となった世帯は280世帯と発表されている。災害ゴミは約22万トンにも及んだ。</p> <p>発災時、ライフラインについては秋田・青森の4市10町2村を担当している21万3,000戸のうち20万7,800戸で停電した。復旧は43時間後の3月13日午前10時にされたが、一部の9,000戸は停電した状況であった。26日後にようやくすべて復旧され、ガソリンスタンドは3月末に営業を再開。しかし470世帯が3月15日まで断水していた。</p> <p>医療活動は、閉鎖しないで稼働できた。避難所の医療や健康管理活動は応援やボランティアの方の手助けがあったので、1万5,733人の避難者に健康状態の確認等の対応が実施された。市民病院は自家発電で電力を7～8割をまかなえるようになっているので、電気が使用できた。</p> <p>自治体の職員や庁舎が被災し機能を失うことがあるが、岩手県では町長が死亡し、職員136名中32が死亡または行方不明となり行政機能がまひしたという事例もあった。</p>

	<p>(2) その後の地域防災活動</p> <p>三陸地方の言い伝えとして、地震や津波の際は家族のことさえ気にせず「てんでんばらばらに自分の命を守るために1人ですぐ避難し、1家全滅共倒れを防ぐ」という、過去に何度も津波災害を受けてきた地域の古くからの教訓がある。そのような指導のもと防災訓練をしていた小中学生約600名の内、親が引き取った1名をのぞき全員助かったことは、このような教えの効果もあったと感じている。子どもに教えたこととして、「君が率先して逃げたら、家族も助けられる」ということがあった。災害の怖さを伝えることは大事だが、過去の教えが子供たちを救ったように、どのように行動すべきかを伝えていくべきだと考えている。</p> <p>災害時には平常時で考えたマニュアルがうまく機能するとは限らない。現場で現実的にマニュアルによる対応をしようとしても、マニュアル通りに対応できることの方が少ないと感じた。防災に関する人材育成が必要である。少なくとも、最低限自分で必要なものを持ち出せるように備えてほしい。また、平常時から避難所、避難経路の確認をすること、どのルートが安全か、危険なブロック塀がルートにはないか、そういった視点で歩いて確認することも重要である。被災時の安否確認は171で確認でき、毎月15日など体験ができるので、家族で使い方を体験しておくこと重要だ。更に、警戒レベルに応じた避難の在り方が異なっているため、状況に応じた避難を行う備えをしておく尚良い。このような細かな備えが、災害時に自らの命を救う一助となる。</p> <p>想定外とは、想定を怠ったものの言い訳である。誰かがやるだろうは誰もやらない。すべての防災は事前対策にある。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;">   </div>
開催地より	<p>災害が発生した時は落ち着いて行動し、自分の命は自分で守るよう努力しないといけないと思った。防災・非難に関するマニュアルが欲しいと思う。</p>